

論文

専門職と拠点の交差に生まれたつながりの再生

——コロナ禍において新設された地域交流スペースの実践に基づき——

遅 力裕[†]

要約：本稿では、コロナ禍において新設された地域交流スペース「カフェあずま」に対する参与観察およびインタビュー調査を通して、つながりの再生ができた経緯を明らかにし、ウィズコロナの中で地域活動を継続することに対する示唆を得て、「新しいつながり事業」への提言を行うことを目的としている。調査結果の分析を通して、「カフェあずま」は専門職と拠点の交差によって実現された感染予防に配慮した居場所であることが明らかになった。そして、ホームヘルパーを「新しいつながり事業（つながり推進員）」の人材として生かす可能性、地域福祉活動および場の再開の必要性への検討に至った。コロナの終息が見えない中、つながり再生の道を開く必要性を痛感している。

キーワード：つながり、ホームヘルパー、居場所、つながり推進員、コロナ禍

目次

1. 研究の背景と目的
2. 研究方法
 - 2-1. 調査対象の概要
 - 2-2. 調査方法
 - 2-3. 倫理的配慮
3. 調査の結果
 - 3-1. 参与観察に基づいた結果
 - 3-2. インタビュー調査に基づいた結果
4. 考察
 - 4-1. つながり再生の経緯
 - 4-2. 「新しいつながり事業（つながり推進員）」への提言
 - 4-3. コロナ禍における地域福祉活動の再開に関して
5. 結びにかえて

1. 研究の背景と目的

世界を覆う新型コロナウイルスの蔓延によって、社会の分断がもたらされている。感

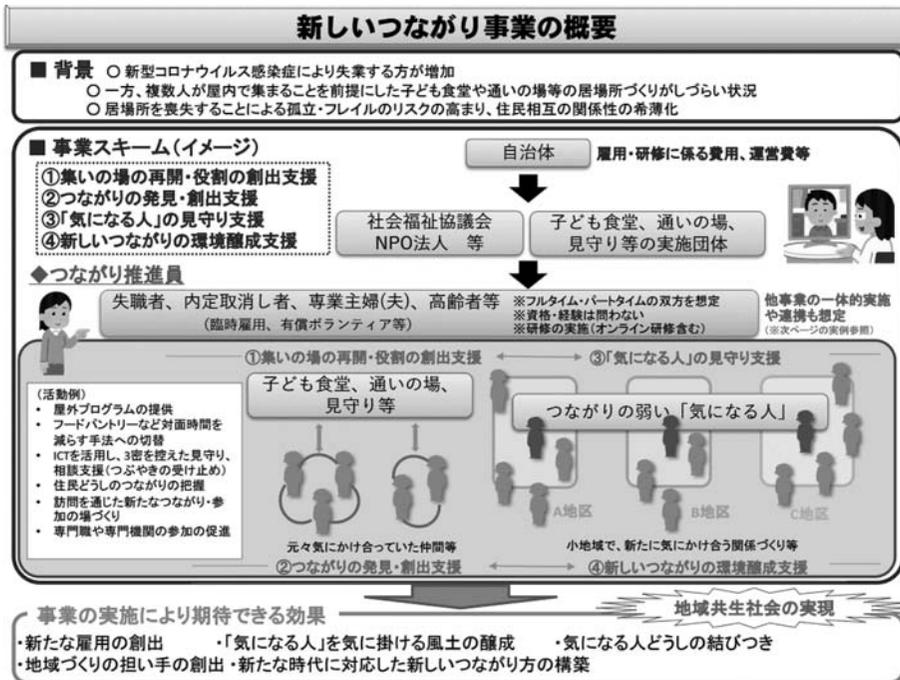
[†]同志社大学大学院社会学研究科助手

*2020年12月17日受付、2020年12月18日掲載決定

染拡大による外出自粛に伴い、各地ではコミュニティカフェ、子ども食堂、地域交流スペースの利用が中止され、ボランティア・市民活動の一時的な停止が見られる。このような分断の経験を通して、危機と災難に対応・転換する力、すなわちコミュニティレジリエンスを含む包括的な地域力の向上、誰でも暮らしやすい包摂的な共助・共生地域社会の形成が喫緊の課題となっている。とりわけ、他者と顔を合わせる機会の減少によるストレスの増加、社会的孤立のさらなる深刻化の中、つながりの再構築が迫られる時代が来たと言っても過言ではない。

このような社会の現状に対して厚生労働省は「新しいつながり事業（つながり推進員）」の展開を提起している（図1を参照）。「つながり推進員」とは、社会福祉法人やNPO法人等が失職者や地域住民などを様々な形で雇い入れ、研修を行ったうえで配置する人材を意味する。具体的な活動内容として、コミュニティソーシャルワーカー等と連携しながら、子ども食堂、通いの場、見守り支援等の実施が困難となっている実施団体等への再開支援を行うこと、ICT等を活用し、密集を控えた形での相談支援や訪問支援を行うこと、訪問を通じた新たなつながり・参加の場づくりを行うことが挙げられている。コロナ禍において地域におけるつながり再構築の必要性が認識されているものの、その方法はまだ模索中であることが、このような行政の動きから読み取れる。

図1 「新しいつながり事業」の概要



資料：厚生労働省「新しいつながり事業」より

10月、京都市上京区に「カフェあずま」という地域交流スペースが新設された。なぜ、そして、いかに自粛の風潮に逆走し、新たに地域活動、つながりの再生に至ったのか、その回答を実践から見出したいと考えた。

そのため、本稿では、「カフェあずま」という事例研究を通して、コロナ禍においてもつながりの再生ができた経緯を明らかにし、ウィズコロナの中で地域活動を継続することに対する示唆を得て、「新しいつながり事業」への提言を行うことを目的としている。「カフェあずま」は地域住民が緩やかに集まる、つながりの場でありながら、ウィズコロナの中で地域活動をいかに継続していくかという実験の場でもある。ここでの試みを通して得られる方法、ヒントは他の地域の参考になると考えられる。

2. 研究方法

2-1. 調査対象の概要

「カフェあずま」は空き店舗を利用して2020年10月3日に開設した地域交流スペースである。「みんな一人じゃないよ」「つながる・ひろがる・ささえあう」というスローガンを掲げ、孤立または生きづらさを抱えている方々の支援を行う任意団体である。毎週木曜日、土曜日の10時半から12時半の間にカフェとしてオープンする。その他の時間はさまざまな団体・グループが気軽に活用・交流できる場として提供することで、地域の自主的な活動を応援している。使用時間帯を「午前」「午後」「夜間」に分け、一時間帯500円という安価で提供している。具体的には、英語で歌を学ぶ会、笑いヨガ、折り紙会、絵手紙展示会等がある。運営資金カンパとして、紙パックジュース、チョコレート等を100円で販売している。運営資金については、半分は国の休眠預金を活用した草の根事業近畿圏ブロック「脱・孤立のための助成金」から、半分は場所貸し代および販売売上によって構成されている。地域交流スペース「カフェあずま」の実践は、メディアでも注目されており、2020年10月5日の京都新聞に掲載、そして、11月24日京都テレビに取材された。

2-2. 調査方法

調査方法は、参与観察およびインタビュー調査法を用いた。筆者は10月から12月まで毎週一回の頻度で活動に参加している。

参与観察では、「観察者としての参加者」として活動に関わりながら情報を収集した。具体的には、「カフェあずま」を利用する人たちの特性（年齢、性格、身体状況）、代表と利用者間の関係、発生した会話、行動および雰囲気などの現場の中で経験したものを観察ノートに記録する。参与観察の方法、手順や記録等はフィールドワークの技法を参

考にしている（佐藤 2002, 小田 2010）。活動への参加を通して、一定程度の団体への理解, そして信頼関係を構築したうえでインタビュー調査の項目を設定し, 実施を行った。

インタビュー調査では, インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを行った。具体的には, 「カフェあずま」の代表者 S と活動参加者 5 名, 計 6 人に対してインタビュー調査を実施した。ここで, 「カフェあずま」に属する代表者 3 人の中で S さんを選定した理由を述べる。代表者 S はホームヘルパー, もう 2 人は定年退職された方, 1 人は元公務員（書類づくり, 他の団体に声かける等の役割）, 1 人は元団体職員（地域の人とのつながりが強い）である。3 人の中, 毎日現場で運営, 調整を実行しているのは代表者 S であり, 前述した「つながり推進員」に近い役割を果たしているコーディネーター的な存在であるため, 調査対象を代表者 S にした。

インタビュー調査は, 代表者 S へは 3 回, 毎回 1 時間で行い, 参加者へは, 一人あたり 10 分間で行った。代表者に対する主な質問項目は, これまでの仕事経験, 団体の設立の背景・目的, 事業内容, 財源, コロナ感染対策, 抱えている課題などである。参加者に対する主な質問項目は, 参加するきっかけ, コロナ禍において出かける不安はあるのか, 利用した感想などである。調査対象者の承諾を得たうえで, IC レコーダーを用いて録音を行い, 逐語録を作成した。逐語録に基づき, 佐藤 (2008), 田垣 (2008) による質的データの分析方法を参考に分析を行った。

2-3. 倫理的配慮

本稿の調査は, 「同志社大学『人を対象とする研究』に関する倫理審査委員会規定」に従い遂行した。本稿における調査の意義, 内容を事前に調査対象者に説明し, よく理解を得たうえで, 個人情報および調査データの提供に同意を得た。また, 個人情報を保護するため, 得られたデータは匿名化して個人が特定できないよう配慮した。なお, 本稿の調査結果とその分析内容の公表は, 調査対象者の同意を得ている。

3. 調査の結果

3-1. 参与観察に基づいた結果

3-1-(a). 場について

この空き店舗はもともと上京区の商店街にある 400 年続いたお米屋さんである。曲がり角にある立地のいい, 2 階建ての風通しのいい物件である。店舗の外に「カフェあずま」の宣伝チラシを張っており, 店舗の前に信号を待つ人たちがよく店の中を覗いてくる。参加者からのお話では昔からよく知られている場所, 懐かしい場所である。

3-1-(b). 「カフェあずま」の活動について

10月3日、開設。プレ企画として大手食品会社の豆腐スープ（消費期限10月16日）無償で提供する活動を行った。全部で200箱（一箱6食）分を配った。当日は京都新聞の取材を受けた。

10月24日（参加者計4名*）代表者Sは京都新聞を見て参加しにきた方々の近況を確認し、コロナ禍において心身の変化などについて気軽に言葉を交わしていた。

11月7日（参加者計5名）折り紙の先生にクリスマス飾り用の折り紙を教わった。一人の参加者の完成品が窓に張り付けられた。

11月19日（参加者計7名）参加者の中の高齢者二人が甘酒を作った。みなさんと甘酒を飲みながら、代表者Sはコロナ禍における高齢者詐欺事件に関する最新情報を参加者に共有し、注意を呼び掛けていた。そして、クリスマスに向けた支援計画などについて参加者に意見を求め、高齢者の知恵を生かせる機会になった。午後には、英語で歌を歌う会というサークルがスペースを借り、10名以上の方が集まって英語を読む練習をしていた。

11月24日（参加者計13名）京都KBS「おはよう輝き世代」という60歳以上の方を対象とするバラエティー番組の取材を受けた。「個性豊か」と言われる参加者たちの笑い声が止まらなかった。一般参加者以外に、協力団体「認知症予防会」「高齢者自分史語る会」も参加した。

12月5日（参加者計13名）知的障害者Yの誕生日会を行った。参加者たちはピアノで演奏したり、歌を歌ったり、ケーキのセッティングなどをした。Yさんが久しぶりの誕生日会で「ありがとう」と言いながら満面の笑顔を見せてくれた。たまたま入ってきた高齢者がコーヒー一杯を飲んで帰った。

（*参加者人数には、代表者Sと筆者を含めている）

3-1-(c). 代表者Sについて

参加者に対しては、元気のづけるような高い声であいさつし、近況確認を行い、参加者の話を傾聴しながら対話する。その後、最新の情報、例えばコロナ感染者数、高齢者詐欺など注意すべき情報を参加者に提供する。また、「主婦としての知恵をいただきたい」や「ピアノがお上手ですね」など参加者に役割を与えながら、褒め言葉をかける。そして、コーヒーを飲みに来た高齢者を一人ぼっちさせないように話しかける。お店を覗く人たちに声をかけて、紙パックジュース、チョコレート等を販売しながら地域交流スペースをPRする。参加者の中には、「代表者Sの人柄に惹かれた」という方は多く、「Sは接着剂的な存在」と言われている。

活動場所として利用するサークルや団体に対しては、常に協力的に電話で希望に合わせながらネットワークを広げている。「カフェあずま」のコーディネーターのような存

在として、全体的な連絡・調整を実施している。

3-2. インタビュー調査に基づいた結果

代表者 S に対する 3 回のインタビュー調査に基づき、以下の (1) から (6) に結果を整理した。カテゴリーを〈 〉, コードを【 】, インタビューの発言内容を「 」で示す。

(1) 〈ヘルパーとしての経験〉

介護福祉現場に 24 年間携わってきた。21 歳の頃にヘルパーの資格を取り、登録ヘルパーとして勤務しはじめた。28 歳でケアマネジャーの資格を取り、32 歳で独立型のケアマネジャー事務所を立ち上げた。39 歳の頃からヘルパーステーションを併設して、ケアマネジメントとヘルパー事業所、障害者福祉サービスを併営している。「枠の中で動くより枠にはみ出ているものをやりたい」という思いで挑戦してきた。

(2) 〈行政・公的支援への不満〉

・【制度の狭間による排除】

長年にわたるヘルパーとしての訪問活動を通して、孤立している人とその家族が公的支援につながらない状況が多々発生していることに怒りを持っている。6090 問題などの困難家族は公的制度から排除されている。

・【安定な枠の中でしか動いていない】

行政および社協は枠の中で物事を測っている。社協は行政の下請けの仕事、たとえば、介護保険などで精一杯で、昔より地域づくり能力はなくなってきている。枠の中で仕事することは危なくない。安定な収入があり、9 時から 5 時までの仕事で済む。しかしまちづくり、地域おこしなどを行うときに、時間を問わずに活動できる環境を作らなければならない。

・【利用できる公共施設がない】

上京区には公共活動のために使うことができる交流スペースはない。地域の人が集まる場所がなく、行き場がない。

・【コロナ禍において行政の不作为】

「国にはあまり期待できない。」行政、社協は古い感覚、発想を持っており、責任を問われるのを恐れている。例えば、人数を減らし、時間を短くして集まる機会を作ってみることや、飲食を伴うところであれば、そこで食べれないなら、持って帰るなどの工夫をしていない。「まず感染対策をしよう、そのうえでやったらいいじゃない。リスクが伴うからって言って、何もしなかったらみんな死んじゃうよ。だって、自殺者が増えて

いるわけだから。」

(3) 〈専門職の限界〉

・【柔軟性がない】

専門職だけでは支えきれない。地域の人を借りて、地域にあるいろんな人に支えてもらうことが大事である。

・【支え側として偏ってしまう可能性がある】

専門職はあくまでも支え側になってしまうため、偏ることがあり、当事者に甘えられることがある。いかに地域の人を巻き込んで、その方たちに主体的に動いていただくかが大事である。専門職は後方支援を行う。

(4) 〈拠点への期待〉

・【コロナ禍における行き場の提供】

コロナの中で、みんなはもっていき場のない怒り、悲しみ、辛さがある。コロナで行き場をなくしている人たちをそのまま放置するのではなく、とりあえず集まることができるような形を作ることが大事である。そして、これまでは利用できる場があったサークルも、借りられる場所がなくなった。

・【孤立支援の受け皿】

ここを脱孤立支援の居場所づくりとして、孤立している人たちの受け皿にしたい。

・【人と人がつながっていく】

コロナ禍において自分もしんどいが、人のために役に立ちたい、どこかにつながっていきたいという気持ちがある。悲しみばかりではなく、喜び、満足感、みなさんが求めている。いくらオンラインでつながってもやはり達成感がない。人間同士で触れ合わないと、生きている達成感や実感が薄れていく。コロナに注意することは大事だが、人とのつながりを持たないことはもっとよくない。そして、今ではなく、一番危険なのは年末、コロナで職を失う人、生活困窮者が増えていくことであり、私たちは何かしらの形で支援につなげていく。

(5) 〈図らずもの場〉

8月のお盆明け、「あずま米穀店」に住む高齢者が娘の家に転居することが決まり、この空間を地域のために開放したいと希望した。

(6) 〈コロナ禍における対策〉

・【コロナを知る】

洗剤を使い、水道水で流せばウイルスを洗い流すことができるということも分かった。コロナウイルスが皮膚に付ければ、9時間生きているということが実験で分かっている。では、正しくうがい、手洗い、消毒をすれば問題ないということがわかった。

・【コロナ対策を徹底的に行う】

利用者名簿の活用、三密を避ける、マスクの着用、手指の消毒、を徹底的に行う。

参加者5名に対するインタビュー調査に基づき、〈コロナ禍においても出かけて参加する理由〉を以下に整理した。インタビューの発言内容を「 」で示す。

・「コロナで死ぬより違う病気で死ぬほうがよっぽど怖いですよ」(70代)

コロナ感染によって死ぬよりもほかの病気で孤立して死ぬことに恐怖を感じている。コロナ以前に違う病気になってしまいそうで、用心しながら、外にもつながりを求めている。コロナにかからない体力、気力をつくる必要がある。

・「行き場がある、生活のメリハリが大事」(70代)

まず、行き場所がある。この日、ここに行くという生活のメリハリが一番大事である。たとえば、三日連続どこにもいけなくても、四日後に行ける場所がある。暮らしにメリハリが出る。

・「夫が入院したから、ストレス発散のため」(70代)

コロナ発症後、旦那さんが病気で入院した。ストレスを発散するために参加している。

・「人の役に立ちたい」(60代)

・「人と喋らない日が続くと気が滅入る」(70代)

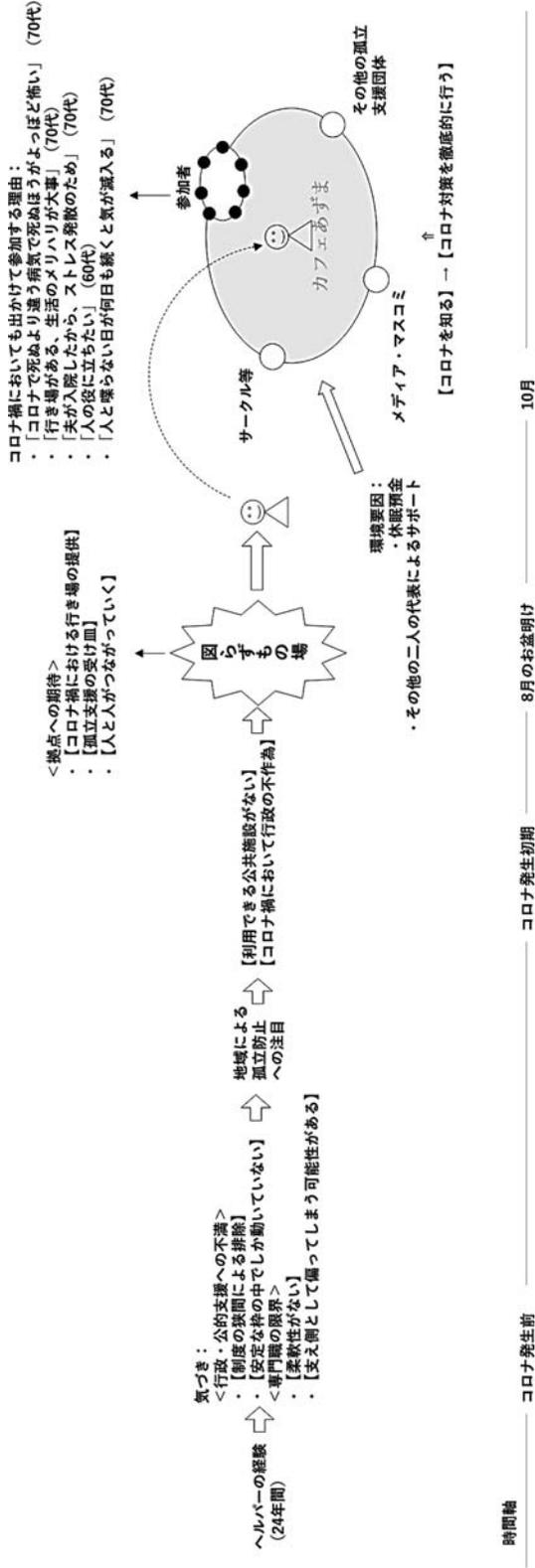
4. 考 察

4-1. つながり再生の経緯

調査結果をふまえ、地域交流スペース「カフェあずま」においてつながりの再生ができた経緯を図2に整理した。主な影響要素を、専門職と拠点、二者から検討する必要があると考えられる。

代表者Sは長年のホームヘルパー、ケアマネジャーの経験を通して、〈行政・公的支援への不満〉(【制度の狭間による排除】【安定な枠の中でしか動いていない】)および〈専門職の限界〉(【柔軟性がない】【支え側として偏ってしまう可能性がある】)に気づき、地域による孤立防止に注目し始めた。コロナ発症後には、【コロナ禍において行政の不作為】また上京区には【利用できる公共施設がない】ことに違和感を生じた。その

図2 つながり再生の経緯



コロナ禍においても出かけて参加する理由：

- ・「コロナで死ぬより通う病気で死ぬほうがよっぽど怖い」 (70代)
- ・「行き場がある 生活のメリハリが大事」 (70代)
- ・「夫が入院したから、ストレス発散のため」 (70代)
- ・「人の役に立ちたい」 (60代)
- ・「人と喋らない日が何日も続くのが嫌」 (70代)

とき、空き店舗という〈図らずもの場〉が提供され、この場を通して、代表 S の思いが形にできた。この拠点を【コロナ禍における行き場】、【孤立支援の受け皿】として提供し、【人と人がつながっていく】場にしていきたいという期待があった。10月に「カフェあずま」が【コロナを知る】【コロナ対策を徹底的に行う】上で開設された。この拠点を通して、行き場を失った人、ストレス発散の場を求める人、人の役に立ちたい人のニーズが満たされ、つながりの再生ができたと考える。そして、活動の場を失ったサークルも活動の再開ができた。

上述した経緯から、専門職代表者 S と拠点の交差によって新たなつながりが形成されたことが読み取れる。そして、環境要因として、休眠預金という財源と、その他の二人の代表によるサポートがある。以下、専門職と拠点について詳細に検討する。

代表者 S の専門性を参与観察による結果 (3) 代表者 S について整理した内容から分析すると、まずは、参加者の近況確認、傾聴、対話という一連の行動を通して情報収集を行うアセスメント能力を有する。また、参加者に役割を与え、高齢者の潜在能力を引き出すというストレングスとエンパワメント視点を有する。さらに、「一人ぼっちさせない」観察力、一般地域住民への宣伝力がある。「S は接着剤的な存在」としてのつながり、コーディネート役割を果たしている。参加者は人間味・親近感のある代表者 S の人柄に惹かれている。つまり、代表者 S はホームヘルパーであるものの、ソーシャルワーカー的な機能を発揮している。

拠点については、まずこの物理的な場は、商店街にあるアクセスしやすい場所であり、昔からよく知られている場所である。横浜コミュニティカフェネットワーク (2018) が、カフェの機能について、①持ちこめる力、②関われる力、③情報を提供する力、④つながる・引き合わせる力、⑤地域づくりの対話を生み、社会に発信する力、があると提示している。「カフェあずま」は、①から⑤のすべてを発揮しているものの、コロナ禍においてはカフェ的な機能よりもっと「居場所」的に機能しているように見られる。つまり、安心感、ストレスの解放、心理的な回復ができる「『居られる場所』、『居たい場所』という心理的価値が付与された」(安齊 2003) 場所である。

4-2. 「新しいつながり事業 (つながり推進員)」への提言

「新しいつながり事業」の中に4つの事業スキーム (①集いの場の再開・役割の創出支援、②つながりの発見・創出支援、③「気になる人」の見守り支援、④新しいつながりの環境醸成支援、) が示されている。本稿の調査結果と対照的に見ると、「カフェあずま」は①②④、すなわち、場の再開、つながりの再生という機能を果たしていることが読み取れる。実際、③の「気になる人」の見守り支援についても触れている。参与観察結果にある知的障害者 Y は代表者 S の介護サービス利用者であり、12月から初めて一

人暮らし生活を始めるため、Yを勇気づけるように意図的に誕生日会を開いた。知的障害者Yは一般の地域住民から掘り出した「気になる人」ではなく、代表者Sがこれまでに関わってきたサービス利用者の中にいる「気になる人」であるが、この場合も「気になる人」の見守り支援に当たるのではないかと考える。

しかし、「カフェあずま」のコーディネーターと言える代表者Sはソーシャルワーカーではなく、「新しいつながり事業（つながり推進員）」の中で言及されている「社会福祉法人やNPO法人等の失職者や地域住民」でもなく、ホームヘルパーである。ここでホームヘルパーが有する専門性について整理を行った。ホームヘルパーの専門性は、介護福祉・医療に関する知識・技術にとどまらず、「利用者のニーズを的確にアセスメントすること」（張2005）「利用者の変化に気づきやすい観察力」（寺西ら2011）、「生活時間を共有することによって高齢者との信頼関係が深まり、孤独感などの心情を引き出すこと」（島海ら2005）等が述べられている。そして、生活環境の調整や近隣関係の調整などの心理・社会的援助、情報提供、相談助言、関係機関への連絡調整などの役割を通してソーシャルワーク機能の一部を担うことも言及されている（大和田2004）。つまり、ホームヘルパーは、アセスメント能力、観察力、調整力が高い、利用者との関係性が近い、という特徴がある。ホームヘルパーは利用者の生活の場に入っているため、訪問対象の状況をもっとも把握しており、利用者の変化に合わせた柔軟性を持つ支援を提供できる。そのため、サービス利用者の中の「気になる人」を地域に引き出すきっかけを作れる重要な人材として活用していく必要があると考える。

「新しいつながり事業」概要（図1）の中では「つながり推進員」として「失業者、内定取消し者、専業主婦（夫）、高齢者等」が想定され、「資格・経験は問わない」「研修の実施」と示されている。しかし、これまでに地域活動、対人援助の経験がまったくない人たちは研修を受けてどれほどつながり推進ができるのかに対して疑問を持っている。つながりとは、単なるつながり推進員から当事者への安否確認、通知連絡ではなく、相互作用を通してその当事者への個別支援、またその当事者がいる環境に既存する資源の活用を支援することが重要である。つまり、つながりは、点から線へ、線からネットワークへ、というようにソーシャルキャピタルの構築、包括的な支援体制の整備の基盤となると捉えられる。そのため、代表者Sのような長年のホームヘルパー、ケアマネジャー経験を持ち、地域住民との親近感があり、対人援助技術、アセスメント能力、コーディネート能力を有する人材は「つながり推進員」のイメージに当てはまるのではないかと推測している。

4-3. コロナ禍における地域福祉活動の再開に関して

4-3-(a). コロナ禍においてもつながりを求めるニーズがある

本稿の調査結果より、コロナ禍においても地域住民は地域福祉活動への参加のニーズ、つながりを求めるニーズがあることが明らかになっている。それらは、コロナウイルスに負けない心身を維持するニーズであり、行き場を求めるニーズであり、人の役に立ちたいという社会貢献ニーズである。「カフェあずま」という拠点を通して、コロナ発生前のように普通に活動できた人、心が癒された人、役割を見つけた人もいる。

コロナにより長期的な外出自粛の影響を受け、免疫力の低下、ストレス、筋力の低下などという健康の二次被害を受ける可能性が高い。とりわけ、心理的健康、精神衛生面では、不安や孤独を感じた自殺者の数は驚愕的な数値で増加している。そのため、地域福祉活動の再開、とりわけ場の再開の必要性を筆者は実感している。

4-3-(b). コロナ禍であるからこそ高まった自発性、主体性

代表者 S は、「こんなに怖いほど順調に行くとは全然思わなかった。京都新聞を読んでボランティアをしたい、カフェあずまを見に行きたい、空間を借りたいという連絡は全然想定していなかった。そうなったのはコロナの関係ですね」と言った。

コロナ禍において、行政は「不要不急」な外出を避けるようにと強調しており、結局住民の「自己責任」になってしまっている。しかし、行政の不作为はむしろ市民の自発性、自主性を引き出す契機になり、今の状況はおかしい、なんとかしないとだめだと思っている人はこの社会の中で動き出している。

4-3-(c). 地域福祉活動の再開における工夫や創意が必要

ウィズコロナにおける地域福祉活動をいかに再開するか、その方法を本稿で用いた事例研究を通して、感染予防に配慮した居場所の開催という結論に至った。手洗い・手指の消毒、マスクの着用、参加者の連絡先情報の把握、換気等の感染対策を徹底的に行っただけでの活動の再開である。コロナ禍においてもつながりが途切れることのないように、地域福祉活動の再開のための多様な工夫および創意が求められると考える。

全国社会福祉協議会地域福祉部・全国ボランティア・市民活動振興センターは、5月に「未来の豊かな“つながり”のための全国アクション」ウェブサイトを立ち上げ、つながることを諦めず、感染防止策を講じながら活動する方法や工夫を集めて提供し、葛藤しながら活動している全国の活動者や組織・団体の実践を後押ししている。大阪、神戸、京都等の地域もそれぞれの地域福祉活動ガイドライン、手引き、ヒント集を作成している。そこには、「共通の感染予防策」「活動種別による感染予防策」と、ユニークな取り組み、お手紙や ICT 等のさまざまなツールを活用した「先駆的な実践例」が含まれる。

5. 結びにかえて

本稿では、コロナ禍において新設された地域交流スペース「カフェあずま」への参与観察、インタビュー調査を通して、つながりの再生ができた経緯を明らかにした。それは専門職と拠点の交差によって実現された感染予防に配慮した居場所である。そして、ホームヘルパーを「新しいつながり事業（つながり推進員）」の人材として生かす可能性、地域福祉活動および場の再開の必要性への検討に至った。

地域交流スペース「カフェあずま」は開設してから3か月も経たず、まだ試行錯誤過程にいる実験事例の一つである。しかし、コロナ禍において分断・孤立された人、「自己責任」を強いられた人にとっては、集まり、話し合う場になり、精神的・心理的に居心地の良い場所になっている。

コロナウイルスの発生によって、社会は「Pause（ポーズ）」キーにかけられたように一時停止状態になった。しかし、社会は停止になっても、人間は生きている。止まっている社会を発動させ、分断された人間をつないでいくため、人と人および人とその環境の関係回復に注力する必要があると考える。

インタビュー調査の際、「カフェあずま」に参加している一人の高齢者に「コロナの関係で孤立を感じていましたか」と質問すると、その高齢者は「いいえ、友達とお電話したりしていますよ。孤立という感じはなかったですよ」と答えた。インタビューの最後には、「あなたと会話するのが一万円の栄養ドリンクを飲んだみたいに元気をもらいました」と私に対して言った。人に認められた感動と、言葉にならない悲しみが矛盾し、心が揺れ動いた。コロナ禍においても医療現場、福祉現場の先頭で奮闘している方々に感謝しつつ、コロナの終息が見えない中、つながり再生の道を開く必要性を痛感している。

参考文献

- ・安齊智子（2003）『「居場所」概念の変遷』『発達』24(96), 33-37.
- ・横浜コミュニティカフェネットワーク（2018）「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及 横浜市市民活動支援センター自主事業報告書」
- ・佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法』新曜社
- ・寺西敬子・中村裕美子（2011）「互いの『苦手』を補い合う多職種連携（協働）アセスメントの必要性」『訪問看護と介護』16(5), 403-409.
- ・小田博志（2010）『エスノグラフィー入門－現場を質的研究する』春秋社
- ・全国社会福祉協議会（2020）「新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮した地域住民等による福祉活動・ボランティア活動の進め方」
- ・大和田猛（2004）『ソーシャルワークとケアワーク』中央法規出版
- ・張允楨（2005）「ホームヘルパーの業務専門性とサービス評価に関する韓日比較」『厚生指標』52

(13), 10-16.

- ・鳥海直美・松井妙子・笠原幸子等（2005）「高齢者の在宅ケアにおける訪問介護事業所のサービス提供責任者の役割特性訪問介護・訪問看護・在宅介護支援センターにおける情報認識の比較から」『日本在宅ケア学会誌』9(1), 61-70.
- ・鳥海直美（2004）「地域ケアシステムにおけるホームヘルパーの役割の再検討－ソーシャルワーク機能に焦点をあてて－」『千里金襴大学紀要』1, 1-7.
- ・田垣正晋（2008）『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』中央法規出版

Revitalization of Social Interactions Resulting from the Encounter between Welfare Professionals and Locus :

A study on the practices of a newly established community
exchange space during the COVID-19

Lirong Chi

The purpose of this study is to shed a light on the revitalization process of localized social interactions, to make recommendations for the Japan government's Ministry of Health and Labour's "New Connection Projects" as well as suggestions for continuing regional activities in the age of COVID-19. Participant observation and interview survey were conducted at the *Cafe Azuma*, a "community exchange space" established during the current outbreak of COVID-19. The analysis of the survey results indicates that *Cafe Azuma* is a social space respectful of infection prevention measures that results from the encounter between welfare professionals and locus. Based on these findings, we examined the possibility of using home-helpers as human resources in charge of facilitating social interactions for the "New Connection Projects", and the necessity of continuing community-based welfare activities by reopening communal spaces. While there is no foreseeable end to the COVID-19, there is a need to pave the way for the revitalization of social interactions.

Key words : Social interaction, Home-helper, Ibasho, Social interaction promoter, COVID-19

